様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　５月２５日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０４０１０５１
研究課題名（和文）　中国における象徴資本としての宗教実践に関する調査研究

研究課題名（英文）　Field Study on religious practices as symbolic capital in China

研究代表者
佐々木　伸一（SASAKI　SHINICHI）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０１７５３７７

研究分野：人文学 A
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：中国、宗教実践、象徴資本、状況構築、近代化

１．研究計画の概要

本研究は、宗教復興が進む中国で 1990 年代以降に顕著になった、宗教を「象徴資本」として活用する政府の政策と、それに対する宗教、とりわけ民俗宗教の側との、相関と相克の複雑多岐に渡る関係性の中で構築される「諸状況」を主なる研究対象とする。

また現政権の宗教政策は、清末から続くモダニティの推進過程の延長線上にあり、現在見られる「諸状況」は過去にも遡及される。

このため本研究では、宗教実践のなかで創出される「諸状況」を、「状況的な社会構築」と把握し、民国期以降における「諸状況」を対比的に視野に入れながら、人びとが時々の政策をどのように考え、どう対応し、何を実行してその結果がどうなったかの事例を積み上げて、中国における宗教実践が構築される様態を明らかにしようとするものである。

以上の研究目的のために、中国の、１東南部経済先進地域の宗教実践の様態、２経済的後発地域の宗教実践の様態、３現政権の宗教政策と実施状況、４清末から民国期、現在に至る宗教政策とそれに対する宗教実践の状況の４点を調査対象とし、文化人類学的な現地調査を中心に実施、対象とした調査地に赴いての聞き取り調査と文献などの史・資料蒐集と解読、またこれら多様な情報の関連性などの比較検討のため、年１回合宿形式での研究会を実施する。

２．研究の進捗状況

本研究では、研究代表・分担者が民俗宗教領域を分けて担当し（代表佐々木伸一：民間宗教職能者一般、分担者渡邊欣雄：風水並びに祖先祭祀関連、池上良正・黄強：寺廟での道教・仏教関係の儀礼と死者供養、志賀市子：中国南部で主に展開されている善堂活動や義塚など）、それぞれが概要で示した１、２の地域で調査を行い、対比しながらの宗教実践の在り方についての事例蒐集を行い、実態の解明を進めてきた。３年目の現状において研究計画策定時に想定した予想をほぼ裏付けられる成果が出ており、それぞれの領域で以下のような事象をこれまでに明らかにすることができた。

政府は、寺廟を伝統のシンボルとしたが、仏教・道教はそれ自体を象徴資本として宗教に重ねることで「自養」のため資金集めの法要を大々的に展開することが可能となった。これにより都市では仏・道教の寺廟で死者供養と位牌・納骨堂の設置という新たな展開が、教義を利用しながら図られ、沿海経済先進地域でのこの現象は、今では全国に及ぶ。同様なことが、南部での義塚や善堂に関しても生じ、その活動は盛んになり、遺棄されている遺骨を収集して祀り、難民の救済などの慈善活動に参加することが象徴資本となって、参加者の政治・経済的な地位の担保にもなる状況が生まれている。また政府の伝統を構築する政策は、儒教の再生を促し、ひいては祖先祭祀とその場である祠堂の復興、宗族の再形成と家譜作成という一連の現象を起こし、新たな宗教の現場が形作られ始めている。ただ、これが今後どのような政治的権力関係の再編をもたらすかについてはその動向を注意深く見る必要があろう。さらに、これまで「封建迷信」とされてきた分野においても大きな変動が生じ、迷信の一つとされた風水は、「伝統」として徐々に象徴資本化され、それを実践する人たちに地位と富をもたらし、周易や卜占、算命といった占いも一定の地位を獲得しつつある。こういった点からすれば、前科研で我々が提唱した宗教の市場経済化とい

う概念設定は、極めて妥当なものであったといえよう。

他方、今やどこにでも見られる巫者や、政府の管理下にない符法術などの分野は、これまで通り迷信とされ続け、これは日本や韓国での強権的支配下における近代化の中での状況と同じで、中国の宗教政策をモダニティの推進過程と把握する我々の推測を裏付けるものとなっている。同時に巫者の活動自体が先の占い師に蚕食され始めるという状況も明らかになっており、宗教の世俗化という変容プロセスも散見され始めているといえよう。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

本研究計画は、中国の広さと変化の速さにもかかわらず、最小限の人数と予算で遂行しようとしたもので、それを各研究者の中国に関するこれまでの膨大な研究実績に基づいた知見の積み上げによってカバーしようとしてきた。実際に計画を進める中でこの目論見は違わず、おおよそは予定通りに進行している。しかしながら中国の広さはやはり尋常ではなく、その変化のスピードはさらにアップしており、中国での一般性を見出すという観点から、その最前線をどこまで把握しているかについてはいささか不安がある。もちろん現象の最先端を追うことなど本質的にできないと承知しているが、調査の密度という面でいささかの不満を抱いている。また現地調査では聞き取りだけで多くの時間を費やさねばならず、歴史的経緯に関する文献蒐集に使う時間が限られてしまっている。このような点はもちろん計画当初にある程度覚悟はしていたにせよ、実際に研究を進める場に立った時には、成果は出しているとはいえ気にせざるを得ないのである。それ故に②という選択となった。

４．今後の研究の推進方策

可能な範囲内ではあるが、この３年間で宗教実践と政府政策の関連並びに象徴資本の活用等について、おおよその見取り図を描くことのできる程度に至っている。ただ本研究では宗教実践に関する事例の積み上げが最も肝要であり、したがって、最終年度においても、これまでに描きだした構図の補強に留まることのない事例蒐集を通じての、検証と確認という作業を行っていきたい。また上記で述べたように、歴史的経緯に関する文献についてもなるべく多くの資料蒐集に努めたい。なお、中国における宗教実践の状況は国内にとどまるものではなく、また東アジアから東南アジアで展開されるそれとの対比によってより明確になる事象であることは前々から承知している。本研究は禁欲的に中国国内という限定で始めたが、見取り図を描ける段階に至ると、次のステップとして中国外との比較に取り掛かることは当然ともいえよう。これについてすでに私費での研究を実施している分担者もおり、したがって最終年度においては、次の研究課題への萌芽として、アジア南部中国圏における若干の調査を一部分担者が行うこととした。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

① 佐々木伸一、「中国調査ノート５：シャーマンの状況」『無差』京都外国語大学、18 号、93-140、2011、無

② 池上良正、「救済システムとしての「死者供養」の形成と展開」『文化』駒澤大学、29 号、5-31、2011、無

③ 黄強、「中国上海市における死者葬儀（上）－清朝晩期から一九四九年までの死者葬儀を中心として－」『貿易風』中部大学国際関係学部論集、Vol.6、40-61、2011、無

④ 志賀市子、「粤東海陸豊地区的義塚信仰與其演変」『宗教人類学』第二輯、187-209、2010、有

⑤ 渡邊欣雄、「市場経済化する中国文化」『貿易風』中部大学国際関係学部論集 4 号、46-71、2009、無

〔学会発表〕（計１件）

① 志賀市子、「中国粤東地域における無縁の死者祭祀の諸相」関西大学アジア文化交流研究センター第 12 回研究集会、2008 年 12 月６日、 関西大学

〔図書〕（計３件）

① 池上良正、佼成出版社、「民俗と仏教―「葬式仏教」から「死者供養仏教」へ―」新アジア仏教史 15『現代仏教の可能性』2011、55-84

② 志賀市子、風響社、「中国粤東地域における無縁の死者祭祀にみる変化と持続―海陸豊の「聖人公媽」祭祀を中心に」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』2010、21-56

③ 黄強 、学苑出版社、「日本薩満信仰研究述評」『域外薩満学文集』2010、368-390